

私は県立高等学校に実習に行き、2年生文系クラスの現代文Bを担当した。実習校は、大学進学を目指す生徒がほとんどで、毎日の授業の中でも先生、生徒ともに受験を見据えた学習が行われている印象であった。ここからは私が実習を行い、主に印象に残った以下の2点について述べる。

1. 自身が行った授業について

私は実習中、「生徒に国語の授業を楽しんでもらう」という点を第一目標とし、ワークの内容を工夫したり、できるだけ噛み砕いたわかりやすい授業を心がけたりした。その点に関しては、授業中や授業後の生徒の反応や、担当の先生の評価から鑑みるに、ある程度目標は達成できたと思う。実際に生徒を前に授業をすることで、自分の表論文に対する読解力や、噛み砕いて生徒にわかりやすく伝える力への自信がついた。

しかし、実習担当の先生と打ち合わせをし、たくさんの先生方からアドバイスをいただく中で、楽しくてわかりやすい授業をすることはもちろんだが、授業内でいかに生徒を考えさせるか、いかに文章の読解力を身に付けさせるかといった、「生徒の力を伸ばすこと」も大きな課題であるということが見えてきた。解説が親切でわかりやすい授業は、生徒にとっては理解ができて楽しい授業になるかもしれないが、生徒の考える機会を奪いかねない。力を身につけさせるためには、生徒は大変な思いをするかもしれないが、読解し、論述することに力を入れた授業も時には必要であることを学んだ。

また、担当の先生から、50分の授業の中で、必ず生徒が息抜きできる時間を作るようにしているというアドバイスをいただいた。授業者としては、50分は一瞬のように感じ、50分の間に少しでもさまざまなことを生徒に伝えたいと思ってしまうが、授業を受ける側としては50分という時間は長く、集中力を維持するのは難しい。そのため、スライドで資料写真を見せる時間を作ったり、先生の雑談の時間を入れたりとどこか息抜きができるポイントを作ることが非常に大切であると学んだ。

最後に、実習では指導していただいた先生が授業を通して大切にしておられることも教えていただくことができた。それは、「明確・的確な発問をすること」「筆者の論理や文章のつながりを意識して本文を読むこと」の2点である。実際、様々な先生の授業を見学させていただいた中で、わかりやすく、力がつくと感じる授業では発問が明確であったり、本文中の論理展開がきちんと解説されていたりしており、この2点の重要性を感じることもできた。

2. 生徒との関わりについて

私は実習中、生徒との交流を積極的に行うことを心がけていた。具体的に行った取り組みは、①毎授業後にアンケートを実施すること、②授業の前後や放課後はできる限り教室に残り、生徒と交流することの2点である。

まず、1点目のアンケートであるが、授業のスピードやわかりやすさについて五段階評価を求めた後、自由記述を任意でしてもらおうというアンケートを実施した。返ってきた評価やコメントが実習中の

励みになっただけでなく、生徒から来た質問が授業中の導入や雑談のタネになるなど、非常に役に立った。改善点を記入してくれる生徒も多く、先生からのアドバイスとは違う角度からの、実際に生徒の目線で授業を受けてみないと気づかないような点に気づききっかけとなった。

次に、2点目の生徒との交流であるが、私は授業が始まる5~10分前には教室に着き、生徒と話をするようにしていた。また、授業後や放課後も次の予定の直前まで教室に残り、交流することを心がけた。その結果、最初はあまり自分から挨拶や会話をしてくれなかった生徒でも最終日近くには自分から挨拶をしてくれたり、話しかけてくれたりと距離感を縮めることができた。自分自身も段々と生徒の趣味や性格を把握できるようになり、実習をより楽しいものにすることができた。

教育実習を通して、多くの貴重な経験をする事ができた。この実習を通して得た経験は、教員としてはもちろん、今後生きていく上で大きな糧となると感じた。